

文章表現の場面論

船所 武志

四天王寺国際仏教大学紀要

第40号 2005年9月

(抜刷)

文章表現の場面論

船 所 武 志

(平成17年3月31日 提出)

言語表現における場と場面との概念について、国語学の諸論を涉獵し、場と場面との概念区分を呈示する。場は、言語表現を支える現場として機能するものと考え、場面は、言語表現によって創出される世界（空間）として捉える。文章表現の場面論として、場面の概念を検討することで、下位区分される場面を想定した。文・文段・文章といった各レベルにおいて、場面を想定することができ、各々、文場面・文段場面（通常、場面）・文章場面（作品世界）といいう。これとは別に、各レベルにおいて、事態場面・叙述場面を、事態時・叙述時とともに提起した。そこには、叙述層分析における対象表現と叙述者表現とが叙述者（語り手）の視点とともにかかわる。とくに、小説作品にみられる場面構築には、叙述が大きく関与するものと考えられるので、具体的に横光利一の作品『蠅』に即して、叙述と場面とのかかわりを、文場面から文段場面にみられる事態場面・事態時を中心に事例研究として考察した。

キーワード：事態場面、叙述場面、事態時、叙述時、叙述層分析

はじめに

言語表現における場面論には諸論あるが、場と場面とを区別して整理しておく^①。場と場面について、『日本国語大辞典』（第二版、小学館）では、次のように説明されている。「場」は、「①ところ。いどころ。場所。にわ。席。②あることの行なわれる場所。集会を催す場所。会場。また、集会の席や、その雰囲気。③その時その時の情況・場合。はめ。おり。とき。④劇や映画などの場面。舞台では、場景の変化がなく、その場面だけでひとくぎりがつく部分をいう。⑤関西地方でいう劇場の観客席の一つ。江戸の土間に相当する。⑥境地。域。⑦花札やトランプなどで、手持ちの札以外の札を積んだりならべたりして、互いに札を取ったり捨てたりしてゲームを進めて行くところ。また、マージャンで東西南北の局面。⑧取引所内

の売買取引をする場所。立会場。⑨心理学で、行動または反応の仕方を規定する環境・条件。⑩ある物理量が空間の各点に応じた値をもつとき、その空間の領域をいう。物理量の種類によって、電場、磁場、万有引力場、重力場、応力場、核力場などがある。力の場。」とある。一方、「場面」は、「①演劇や映画での一情景。また、小説、詩などのあるシーン。②進行している物事のその場その場の有様。その時々の光景。また、その場所。③ある物事が行なわれたり、あることばが用いられたりするとき、それに制約、影響を及ぼすまわりの事情や状況。④取引相場で、市場の状況。場況。」とある。とくに、「場面」③の用例には、時枝（1941）から、「言語は単なる主体の内部的なものの発動ではなくして、これを制約する場面に於いて表現されることによって完成するのである」と

いうように説明されている。

「場」と「場面」との定義には、一部に共通する面もあるが、差異も明瞭である。場は、現存する場所としての空間を意味することが多く、場面は、情景、光景、あるいは状況といった認知される空間を意味することが多いようである。本稿では、その差異に注目して、両者の概念を区別した上で、言語表現における場と場面では、場が言語表現を支える現場として、場面が言語表現によって創出される世界（空間）として捉えた²⁾。概念を分かつことによって、文章表現では、場面の構築が、その叙述と構成とに与ることが明瞭に示されうる。具体的な小説作品を事例に分析を試み、とくに、「場面」構築と叙述とのかかわりに着目した。

1. 言語表現における場と場面—国語学を中心に—

国語学における場と場面についての諸論を渉猟しておきたい。そこには、どのような言語表現を視野に入れているかによって、場・場面の概念、使用にも影響を及ぼしているようである。

時枝（1941）では、「言語の存在条件として、一主体（話手）、二場面（聴手及びその他を含めて）、三素材の三者を挙げることが出来ると思ふ。この三者が存在条件であるということは、言語は、誰（主体）かが、誰（場面）かに、何物（素材）かについて語ることによって成立するものであることを意味する。」として、「場面」を話し手、素材を除く言語の存在条件として、聞き手を含んだものとしている。また、「場面は又場所を満たす事物情景と相通するものであるが、場面は、同時に、これら事物情景に志向する主体の態度、気分、感情をも含むものである。」として、主体の志向性をも内包している。

三尾（1948）では、「言語行動一般の場」として、「話の場」が定義される。すなわち、「あるし

ゅんかんにおいて、言語行動になんらかの影響をあたえる条件の総体を、そのしゅんかんの話の場」という。」と述べ、さらに、「文の場についても同じことがあてはまる」として、以下のように、〈文の類型〉が示されている。

- (1) 場の文：〔例〕雨が降っている。
- (2) 場をふくむ文：〔例〕それは梅だ。
- (3) 場を志向する文：〔例〕あ！ 雨だ！
- (4) 場と相補う文：〔例〕考えているのだ。
／尤もだよ。

上記4種の「文の場」は、本稿でいう「場（現場）」に近いものだが、(1)では、描写文として機能する場合、本稿でいう「場面」をも想定しうる。

佐久間（1952）では、「その範囲を設定してそれを提出するという作用を『話題の設定』あるいはトピックの提出ということができましょう。こうして設定された範囲は、表象活動の心的過程において、個々の叙述や判断を誘導する『場』を形づくります。それは話題の場といったもので、行動の現場における発言内容の理解が現場の事態を直接に認知することを前提とするように、非現場における事がらの叙述も、それぞれの非現場を話題の形において提出することによって設定された、この『話題の場』にはめこんで理解されるのです。」と述べている。「話題の場」ということばであるが、非現場の話題が表象化されて表現されたり、理解されたりするのは、本稿でいう「場面」の概念に相当するものである。「非現場の話題」は、小説世界を包含する概念であろう。

今井（1975）では、場と場面とに明確な区別を齎す。「文章に書くとは、書くことによって場を場面化することである。場への依存を離れて、場から自立することである。」「発言の『場』と、表現のなかに組み入れられた『場』とは違うから、前者を、たんに『場』（あるいは強調したいとき

は『現場』)とよび、後者を区別して『場面』とよぶ。」として、「場面」を「表現に組み入れられたもの」との定義づけがなされ、次の式にみられるように、区別を明瞭にする。

$$\text{場} = \text{素材} \times \text{空間} \times \text{時間} \times \text{主体}$$

$$\text{場面化} = \text{素材} \times \text{空間} \times \text{時間} \times \text{主体} \times \text{言語}$$

$$\times \text{読者} \times \text{距離}$$

本稿での場と場面との考え方も、この今井理論に負う所が大きい。

塚原(1963)では、「言語は言語を囲繞する条件との関係において、現実的に規定される。この、言語を現実的に規定する条件を、場面と呼称するのである。」と定義づけている。「言語の現実的な成立を規定する場面の機構は、単一ではない。それは、少なくとも二つの観点から、検討することができる。」として、「場面の関係式」を解説する。

$$\text{場面} = \text{場面 I} \times \text{場面 II}$$

$$= (\text{場面 A} + \text{場面 B}) \times (\text{場面 C} + \text{場面 D})$$

$$= (\text{場面 A 1} + \text{場面 A 2} + \text{場面 B})$$

$$\times (\text{場面 C 1} + \text{場面 C 2} + \text{場面 D})$$

「第一は、いわば、構造論的観点からする場面の分析である。この観点から定立される場面を、場面Iと仮称しよう。これは、言語主体を規定する場面Aと、言語行動を規定する場面Bとに類別する。さらに、場面Aは、言語主体S(話し手・書き手)を規定する場面A1と、言語主体R(聞き手・読み手)を規定する場面A2とに類別する。(略) 第二の観点は、いわば、成立論的なそれである。この観点に立脚すれば、言語主体の主観的構成として成立する場面Cと、言語行動の客観的実在として成立する場面Dとを類別する。場面Cは、言語主体Sの主観的構成として成立する場面C1と、言語主体Rの主観的構成として成立する場面C2とに類別する。そして、この観点から規定される場面を、場面IIと仮称しよう。(略) 言

語の場面は、したがって、換言すれば、場面Iと場面IIとの相乗として成立する。」と述べている。

用語は「場面」で統一し、「場」という語は用いていないが、「場面」に関する詳細な検討がなされ、主体と行動との構造論的・成立論的分類に特徴がある。

土部(1973)では、「場面」という語に統一して、以下のような「場面論」を展開している。「わたしたちは、言語主体(表現主体・理解主体)として、現実場面(現場)・表現場面(表現過程)・言語場面(言語作品)・理解場面(理解過程)にわたる言語表現の機構をくぐりながら、多種多様な生理的・精神的な言語行動を行っている。」として、場面間の関係を次のように解説している。「四つの基本要因——(A)送り手、(B)受け手、(C)素材、(D)媒体——は、(A)が(B)に向かって、(C)について、(D)によって、送付行動(表現行動)をいとなむ、その状態を客観的な存在として觀察する立場でとらえたばあい——『現実場面』におけるものいいである。表現主体は、そうした現実場面を意識内容——『表現場面』としてとらえるとともに、それを言語作品——『言語場面』に定着させていくいとなみ——表現行動を行なう。言語表現をなりたたせる基本的な条件としてはたらくのは、客体的場面の『現実場面』(における諸要因)ではなくて、主体的場面の『表現場面』(における諸要因)である。」という。

言語表現の機構を四つの場面からなるものとして、規定しているが、本稿では、とくに、「言語場面」とよばれるものに注目して、そこに創出される世界をとくに「場面」と名づけて考察の対象としている。他の三つを「場」として区別したい。

永野(1986)では、「客観的な事態が話し手の頭の中に反映したものを、言語表現の『場面』と名づけることとする。同じようにして、聞き手の

頭の中にも、聞く『場面』を形作るということになる。」という。本稿で言う「場面」の概念に近いものである。「客観的な事態の五つの要素、『話し手』『聞き手』『素材』『環境』『文脈』は、たがいに相関関係をもって働いているわけであるが、それらが話し手（あるいは聞き手）の主觀の中におかれたとき、姿を変えると考えなければならないのである。」という。誤解・曲解のメカニズムも説明がつくことになる。事態の表象化が場面を形成するといえるのではなかろうか。

西郷（1968）では、その文芸学の立場から、「形象相關の展開の筋のある一部がある一定の視点・視角から構成されているひとまとまりを場面といいます。」と定義づけている。「場面とは『場・面』、つまり場と面ということなのです。場とは、形象の相関関係をあらわし、面とは、それがいかなる視点・視角（またいかなる表現方法・形式）から構成されているかということをあらわすものです。場とはしたがって筋にかかわり面とは構成にかかわるものです。」とし、特徴的な場面論を展開している。西郷（1998）では、「場面というのは『場』（筋——形象の相関）と『面』（構成）の組み合わされたものです。（略）いかなる形象と形象のいかなる相関関係の筋が、いかなる視点から、いかなる表現方法によって構成されているかということ——そのひとくぎりを場面と名づけているわけです。」と述べている。文芸学という立場から、物語世界が念頭に置かれているのだが、場面を事態の表象化と捉えるならば、語られる物語世界がその対象となるのは、当然のことといえよう。ただ、事態の表象化は、語られる物語の世界と等価ではなく、包含するものと考えられる。場面論を展開する上では、物語世界に、典型的な事例をみるとできよう。

2. 文章表現における場面

言語表現における場と場面については、その概念を区別して捉えておきたい。場については、言語表現が成立する際、言語主体（表現主体・理解主体）を含む現場を指すものとする。言語表現を支える現場として、現実に存在する空間を考える。一方、場面については、言語表現によって創出される世界（空間）として捉える。場が言語表現を支える現場であり、言語表現の外部に存するのに対し、場面は、言語表現による表象としての空間であり、言語表現の内部に存するものである。ものごとは、表現行為によって、あるありかたを呈して言語表現に定着させられる。これを事態化と称しておく。したがって、場面は、表現行為によって事態化された表象空間である、といいうる。また、事態化された表象空間は、理解行為によって改めて表象される。場面は、理解行為によって表象化される事態空間である、ともいいうる。その意味で、場面は「事態／表象空間」である、といえよう。

一般に、言語表現には、表現主体（叙述者）による叙述するという行為の時間とそこに表現される事態化されたことがらが有する時間とが存する。前者を「叙述時」、後者を「事態時」という。語り手を想定する近代小説の場合、語り手の存在場面としての叙述場面に叙述時が存することになる。一方、語られる物語世界としての事態場面に事態時が存することになる。描きた次第で、各々の場面に存する時間は流れもするし、留まることもある。むしろ、物語の時間は、事態場面によって生み出されるものなのであろう。したがって、こうした場面や時間は、具体的な作品では、その叙述のありかたに深くかかわるものと思われる。

叙述は、対象表現と叙述者表現とに分かちうる。対象表現は、ものごと本位の叙述をいう。小説の場合には、人物や事物の描写をいうことになる。

叙述者表現は、叙述者本位の叙述をいう。説明や評釈（解釈・評価）といった表現をさすこととなる。対象表現によって事態場面が形成され、叙述者表現によって叙述場面が形成されるものと考えられる。

ものごと本位に事態場面を形成する対象表現では、典型的な文表現として、〔ナニガドウスル〕型の現象文がある。描写としてのテクスト機能を有するので、描写文と称することがある。一方、とらえかた本位に叙述場面を形成する叙述者表現では、典型的な文表現として〔ナニハナニダ〕型の判断文がある。説明（解釈）としてのテクスト機能を有する。

しかし、〔ナニガドウスル〕型の現象文も主格の助詞「ガ」が提題の助詞「ハ」に替わると、「ナニ」を提題化する叙述者の意図が加わる。さらに、文末に「モノダ」が下接すると、〔ナニハドウスルモノダ〕という「モノダ」型の判断文となる。よって、対象表現と叙述者表現とは文章表現の叙述を二分割する対峙関係に常にあるのではなく、対象表現を叙述者表現が含みうる包摂関係となる場合があり、対峙から包摂までの多様な関係性を有する。同時に、そのような表現によって形成される事態場面と叙述場面もまた対峙から包摂に至る関係にあるといえる。それは、語り手の視点が移動することと無関係ではない。

【例1】

田舎道。一本の木。

夕暮れ。

エストラゴンが道端に坐って、靴を片方、脱ごうとしている。ハアハア言いながら、夢中になって両手で引っ張る。力尽きてやめ、肩で息をつきながら休み、そしてまた始める。同じことの繰り返し。

ヴラジーミル、出て来る。

（ベケット『ゴードーを待ちながら』第一幕冒

頭ト書き）

【例1】では、状況と人物の行動といった事態場面が中心に叙述されている。「ガアル」型、「スル」型の描写文から、「同じことの繰り返し。」に至っては、「デアル」型の説明文である。最後は「スル」型の描写文である。これら冒頭の連文は、役者への指示ともとれようが、ト書きとしての意味的連合体（文段）とみるならば、描写・説明という解釈も成り立とう。戯曲の場合、事態場面の呈示が主となる、といえよう。幕・場といわれるものは、本稿でいう「場面」を構築し、舞台・客席・劇場といった実在空間は、現実的な「場」である。

近代小説においても、事態場面が主として呈示されるが、明治期の小説では、表現主体（語り手）が理解主体（読み手）に直接語りかける叙述も散見する。

【例2】

お勢の帰宅した初より、自分には気が付かぬでも文三の胸には虫が生た。なれどもその頃はまだ小さく場取らず、胸に在ッても邪魔に成らぬ而已か、そのムズムズと蠢動く時は世界中が一所に集るが如く、又この世から極楽浄土へ往生する如く、（中略）「何したのじゃアないか」ト疑った頃には、既に「添たいの蛇」という蛇に成ッて這廻っていた……（中略）「若しうなればもう叔母の許を受けたも同前……チヨツ寧そ打附けに……」ト思つた事は屢々有つたが、「イヤイヤ減多な事を言出して取着かれぬ返答をされては」ト思い直してジット意馬の絆を引緊め、藻に住む虫の我から苦んでいた……これからが肝腎要、回を改めて伺いましょう。

（二葉亭四迷『浮雲』第二回風変りな恋の初峯入上末尾）

【例2】に引用した最後の部分「これからが肝腎要、回を改めて伺いましょう。」は、叙述者表

現として、語られる物語世界から逸脱して叙述場面を形成し、理解主体に向かうことばとして機能している。近代小説の初期にみられる特徴もある。【例1】の叙述者表現では、語られる物語世界からの逸脱ではなく、事態場面の構築を図る機能を有していると思われる。叙述者表現と一括されても、機能するところが異なる場合がある³⁾。

【例3】

林 お忙しいところをお集まりいただきましてありがとうございます。今日はお三方に、内側から見た「熊野」、そしてそれを全国へ発信するという形でのお話を伺えればと思います。最初に、「熊野」という呼称について、山本さんからご説明をいただけませんか。

山本 「熊野」というのは、「隈っ子」という意味、ちょうど都から見て紀伊半島の南の端に当たりますので、隈っこで未開の地というイメージがあったと思います。そういう雰囲気の中から、様々な熊野神話などのイメージが形成されてきたのだと思います。(中略)

林 明治初年に牟婁郡が四つに分けられたわけですが、「熊野」と呼んだ時、皆さん、それぞれどこまでを熊野としてイメージされるのでしょうか。

楠本 私は、「熊野の学問」ということにあまり詳しくはありませんが、普段歩いて回っている感じでは、地形とか、熊野の持つ特色のある土壤の続く範囲が、熊野ではないかと考えています。そうすると、奥は吉野あたりの近くまで、そして東のほうは伊勢平野の近くあたりまで、それから南のほうは串本もしくは串本を少し過ぎたあたりまでの範囲かな、と考えます。これは地形的な面から見て、良く似ているということからのことですが。

林 楠本さんは実際に歩かれていますから、地形的に捉えておられるわけですね。高木さん

はいかがでしょうか。

高木 私は、現在行政的に区分された四つの牟婁郡がほぼ「熊野」に相当するのではないかと思います。熊野川の南を南牟婁、東を東牟婁、そして北を北牟婁、西を西牟婁。ご存じのように、牟婁といいのは、「有漏」に対する「無漏」であって、有漏は仏教でいう煩惱の世界、迷いの世界を言うようで、それに対して、「無漏」は悟りの世界、聖地という意味合いが込められている、というふうに聞いております。そのように、宗教と関わり合いが深いところが牟婁であり、熊野でもあると思われます。(中略) 時代によって多少境界の変動がありましょうが、長島あたり、伊勢と接するところから南側を、熊野と総称したのではないかと思われます。(後略)

(「座談会 熊野学への歩み」冒頭部)

【例3】では、林氏が司会進行役となって、山本、楠本、高木の三氏に意見を求めるという座談会となっている。その意味で、各談話は座談会の「場」で機能するのだが、この座談会自体が「誌上」座談会であることから、座談会全体が理解主体(読み手)に開かれたものとして存在している。また、林氏は司会という役割上、相手目当ての発言が明瞭であるが、同時にその発言は、当面の相手だけでなく、脇に控える他の二人にも向かうものである。司会だけでなく、座談会の参加者が当面の相手とともに、脇の相手を意識しているといえよう。そのような座談会を理解主体(読み手)に提供している、と考えることができる。このように文章化されると、座談会自体が事態場面として形成され、呈示されることになる。日常の談話を記録したものも同様であるが、全体を統括する叙述主体(語り手)の存在は、むしろ、見当たらないので、叙述者表現による叙述場面は、明瞭には現れてこない。その意味では、事態場面がクロ

ーズアップされて、叙述場面は後退した表現といえるであろう。ただ、この座談会が、専門雑誌『国文学 解釈と鑑賞』の巻頭に位置するものであることから、企画・編集者の意図するところは垣間見える。そうした意図を司会進行に反映させてもいる。また一方では、各談話は、その発言者の主觀によってとらえられた対象表現と叙述（発言）者表現とで形成されている。したがって、各談話のレベルでは、事態場面と叙述場面とが相俟って談話内容を形成している、といえよう。

3. 場面と叙述・構成一事例分析を通して一

文章表現は、その叙述が層序をなしてひとまとまりの構造形態を構築している。叙述と構成との相関をみる叙述層分析を通して、場面がどのように構築されて相互に関連をもっているのか、そこに叙述がどのようにかかわっているのか、について考察する。

横光利一『蠅』（【例4】）の全文について、叙述層分析を行なった。作品は、126文からなる。【表】に示したように、原文段階で10の文段（場面）に分かたれている。文レベルから、連文の意味的連合体としての文段レベル、そして文段一から十の場面連鎖と場面相関とによって作品が成立する。原文段階での10の区分は、そのまま文段として認定しうる。

- 一 真夏の宿場の空虚さ、蠅の動き
- 二 将棋に興じる馭者
- 三 息子の危篤で馬車を待つ農婦
- 四 駆け落ちする若者と娘
- 五 母親に手を叟かれてきた男の子
- 六 田舎紳士に近づいてうろたえる農婦
- 七 蒸しあがる饅頭を待つ馭者
- 八 出発の準備にかかる馭者
- 九 出発して炎天下を走る馬車
- 十 馭者の居眠りで崖下に墜落する人馬

叙述層は、大きく対象表現と叙述者表現とに分かつことができる。対象表現は、事物・状況描写と人物描写とに区分できる。さらに、人物描写は、会話・行動の二区分とした。人物の心理描写がないことが、この作品の特徴でもあり、横光の意図でもある。したがって、作品は、対象表現である客観的描写の際立った作品である。叙述者表現も少なく、説明・評釈として一括した。表中、各文の話題の中心となる語と文末形態とを記した。数字の後のa b cは、複文構造などで一文が層を跨ぐ場合に振り分けたものである。人物の括弧は、その人物が無標であることを表す。

【例4（一）】

01真夏の宿場は空虚であった。02ただ眼の大きな一疋の蠅だけは、薄暗い厩の隅の蜘蛛の巣にひっかかると、後肢で網を跳ねつつ暫くぶらぶらと揺れていた。03と、豆のようにほたりと落ちた。04そうして、馬糞の重みに斜めに突き立っている藁の端から、裸体にされた馬の背中まで這い上がった。

冒頭の01文は、〔ナニハナニダ（デアル）〕型の典型的な判断文であるので、叙述者表現に位置づけられる。02～04文は、〔ナニガドウスル〕型の現象文であり、事物「蠅」の行動が描写されるので、対象表現、事物・状況描写に位置づけられる。文末はすべて「タ」形をとっているが、01文と02文以降では、性質を異にする。

01文は、状況（「宿場ガ空虚デアルコト」）に対する叙述者（語り手）の判断を含めた説明として呈示されている。文末に「タ」形をとっていることから、事態時と叙述時との差異を示して叙述場面が際立つ。叙述場面において「タ」が機能する。一方、02文には、提題の「ハ」が用いられ、文末「ティタ」のアスペクトが関与した「タ」系形であるが、事物描写であることから、事態時と叙述時との差異を示して事態場面が際立つ。文末の

「タ」も事態場面で機能する。そこには、語り手の視点が関与する。すなわち、01文では、叙述場面に存する語り手の視点が、02文以降では、事態場面に存することになる。

一文ごとの検討から、意味的なまとまりの文段レベルでこの四文を捉えると、01文で際立つ叙述場面が02文以降で際立つ事態場面を包摂しているといえよう。事物「蠅」の動きのみに着目して、宿場の空虚を表した象徴的な冒頭場面である。さらに、二以降の文段を検討し、場面連鎖、場面相関を考慮すると、01文の包摂は、他の文段を含むものと解せる、特徴的な一文である。

【例4（二）】

05馬は一条の枯草を奥歯にひっ掛けたまま、猫背の老いた馴者の姿を捜している。

06馴者は宿場の横の饅頭屋の店頭で、将棋を三番さして負け通した。

07「何に？ 文句をいうな。もう一番じゃ。」

08すると、廂を脱れた日の光は、彼の腰から、円い荷物のような猫背の上へ乗りかかって來た。

対象表現の事物・状況描写、人物描写は、描き出されるものごととしての事態場面を呈示するのだが、そこには、そのような事態を表現しようとする叙述者の存在が顕在するときと潜在するときがある。文末に「タ」形をとるか、「ル（非タ）」形をとるかで異なるものと思われる。例えば、05文では、提題の「ハ」が用いられるものの、文末は、「テイル」というアスペクト形式を含んでの非タ形である。対象表現の事物・状況描写のために、事態場面がクローズアップして、語り手の視点も事態場面に即した叙述場面に存する。端的に換言するならば、事態場面に語り手の視点が存するかのように思われる状況である。さらに、文末の「テイル（非タ）」形は、語られる事態が有する時間（事態時）に理解主体（読み手）を誘

う。06文の文末「タ」形では、事態場面がクローズアップしているものの、事態時と同時に語り手の有する時間（叙述時）が顕在化すると考えられよう。事態場面内部で、事態時と叙述時とが呈示される。視点が事態場面に存するために、叙述場面がクローズアップされるまでには至らない。07文は、会話描写（直接会話）なので、典型的な客観描写として、事態場面が呈示される。（語り手の存在がまったくないわけでもない。そのような会話を「聞く」主体として、存在しうる。）08文も、事態場面がクローズアップされる。「日の光」を提題化し、事態時の時間幅を示すことで、時間の経過を表現している。一方、提題の「ハ」、文末の「タ」に加えて、接続の「スルト」が客観的に状況を観察している叙述者の存在を証している。総じて、将棋に興じる馴者の姿が事態場面として呈示されている。

【例4（三）】

09宿場の空虚な場庭へ一人の農婦が駆けつけた。10彼女はこの朝早く、街に務めている息子から危篤の電報を受けとった。11それから露に湿った三里の山路を駆け続けた。

12「馬車はまだかのう？」

13彼女は馴者部屋を覗いて呼んだが返事がない。

14「馬車はまだかのう？」

15歪んだ畳の上には湯飲みが一つ転っていて、中から酒色の番茶がひとり静に流れていた。
(後略)

09文は、人物「農婦」の行動描写で、文末の「タ」形が、事態場面において事態時と叙述時とに差異を示す。語り手の視点は、事態場面に存するため、叙述場面はクローズアップされない。10・11文では、10文の「この朝早く」という時間副詞句によって、現前する事態場面から過去を引き出し現前化することになる。事態場面内部で、

過去事態の現前化という対象表現がなされる。10・11の文末「タ」形は、そうした意味で、事態時と叙述時とに差異を示すが、事態場面のクローズアップは変わらない。12・14の会話描写に挟まれた13文は、「農婦」の行動と状況の描写と解せるが、提題の「ハ」、逆接の「ガ」そして「返事ガナイ」という文末非存在（もしくは存在の否定）形式が、叙述者（語り手）の存在を証すのだが、視点が事態場面から逸脱していないと考えられよう。文段三は、馬車の出る宿場へ馳けつけた農婦に焦点が当る。叙述者表現としては、19文の「答えたのはその家の主婦である。」のみ。これは、18の会話についての説明をする判断文である。全体としては、人物「農婦」の行動・会話を中心とする事態場面が際立った文段である。

【例4（四）】

31野末の陽炎の中から、種蓮華を叩く音が聞えて来る。32若者と娘は宿場の方へ急いで行った。33娘は若者の肩の荷物へ手をかけた。

34「持とう。」

35「何アに。」

36「重たかろうが。」

37若者は黙っていかにも軽そうな容子を見せた。38が、額から流れる汗は塩辛かった。（後略）

31文は、事物・状況描写で文末「テクル」の非タ形である。事態場面がクローズアップされ、事態時が際立つ。32・33文では、人物「若者」「娘」の行動が文末「タ」形で描写されている。事態時と叙述時との差異は生じるもの、事態場面、事態時が際立っている。叙述者（語り手）の視点は、冒頭の31文より事態場面から逸脱せずに機能する。34～36文は会話描写で、事態時が際立つ。37文の人物「若者」の行動描写を経て、38文では、〔汗ガ塩辛イ〕という事態が、「若者」にしか知りえない感覚によるものなので、叙述者（語り手）の視点が人物「若者」に移入されたものとして解

釈することが可能である。より一層、叙述者の視点が後退し、叙述時よりも事態時が事態場面内部で際立っているといえよう。文段四では、二人の人物が互いに気遣いながら、宿場に急ぐ様子が事態場面として呈示されている。

【例4（五）】

49宿場の場庭へ、母親に手を曳かれた男の子が指を銜えて這入って来た。

50「お母ア、馬々。」

51「ああ、馬々。」52男の子は母親から手を振り切ると、厩の方へ馳けて来た。53そして二間ほど離れた場庭の中から馬を見ながら、「コリヤッ、コリヤッ。」と叫んで片足で地を打った。（後略）

49文では、「母親に手を曳かれた男の子」が場庭へやって来た様子が文末「タ」形の行動描写で描かれる。50・51の会話描写は、文段五の末尾58・59でも繰り返される。「母親」の気のない鸚鵡返しの返事よりも興味をもった馬にかかるわらうとする「男の子」の姿が、文段五では描かれる。行動描写の文末はすべて「タ」形で事態時と叙述時との差異は示されるものの、事態場面、事態時が際立っている。

【例4（六）】

60「おっと、待てよ。これは悴の下駄を買うのを忘れたぞ。あ奴は西瓜が好きじゃ。西瓜を買うと、俺もあ奴も好きじゃで両得じゃ。」

61田舎紳士は宿場へ着いた。62彼は四十三になる。63四十三年貧困と戦い続けた効あって、昨夜漸く春蚕の仲買で八百円を手に入れた。64今彼の胸は未来の画策のために詰っている。65けれども、昨夜錢湯へ行ったとき、八百円の札束を鞄に入れて、洗い場まで持って這入って笑われた記憶については忘れていた。

66農婦は場庭の床几から立ち上がり、彼の傍へよって来た。

67「馬車はいつ出るのでござんしょうな。悴が死にかかっていますので、早よ街へ行かんと死に目に逢えまい思いましてな。」

68「そりやいかん。」(中略)

71若者と娘は場庭の中へ入ってきた。72農婦はまた二人の傍へ近寄った。(後略)

文段六では、冒頭が会話描写(60文)で始まる。事態場面を呈示し、事態時が際立つ。理解主体(読み手)をいきなりそのような事態場面へ導入する。作品冒頭でもとられる手法が、ここでは、文段冒頭でとられる。61文は、人物「田舎紳士」の行動を文末「タ」形で描写する。事態場面、事態時が際立つが、60文の後に置かれると説明的な機能を醸し出す。62文は、事態場面が後退するわけではないが、叙述者(語り手)による説明として機能している。63文は、前半説明的で、後半文末「タ」形の行動描写がなされる。しかも、「昨夜」の時間副詞が、過去事態を現前化する。64文では、文頭「今」と文末「テイル」とが、事態場面、事態時の物語現在を現前化させるのだが、64・65文は、「田舎紳士」の心中を表現するもので、その意味では、人物に寄添ってその心中を説明する叙述である。いずれにしても、事態場面内部で叙述者(語り手)の視点が機能している。

文段二より各文段で登場する人物が異なるのだが、それぞれの人物に焦点を当てて事態場面が構成されてきた。この文段六では、はじめて人物間のかかわりが「農婦」を中心に描かれる。66文は「農婦」の行動が文末「タ」形で描写される。「田舎紳士」だけでなく、到着した「若者と娘」(71)にも「近寄っ」て(72)、馬車が出ないことへの苛立ちが会話描写で表される。文段六も総じて、事態場面がクローズアップされ、事態時が際立つた文段であるが、悠然と構える「馭者」(二)に對して苛立つ乗客たち(三~六)という構図を鮮明にする場面の連鎖と相関性が際立った文段であ

る。

【例4 (七)】

83馬車は何時になつたら出るのであろう。84宿場に集つた人々の汗は乾いた。85しかし、馬車は何時になつたら出るのであろう。86これは誰も知らない。87だが、もし知り得ることの出来るものがあったとすれば、それは饅頭屋の竈の中で、漸く脹れ始めた饅頭であった。88何ぜかといえば、この宿場の猫背の馭者は、まだその日、誰も手をつけない蒸し立ての饅頭に初手をつけるということが、それほどの潔癖から長い年月の間、独身で暮さねばならなかつたという彼のその日その日の、最高の慰めとなっていたのであったから。

文段七は、叙述層分析にみられるように、叙述者表現が際立っている。事態場面よりも叙述場面がクローズアップされ、事態時よりも叙述時が際立つた叙述となっている。83・85文は、推量的判断文である。客観的描写は、84文のみである。この一文においては、事態場面がクローズアップされるが、文段としては、際立たない。86文でも、事態場面の傍観的叙述者の判断が際立つ。87文の「とすれば」、88文の「何ぜかといえば……のであったから」といったことばが叙述者表現の説明・評釈を示している。

文段二から五まで、各登場人物によって事態場面が形成されていた。六でも、新たな人物が登場するが、他の人物との交流があり、馬車を待つ場庭の様子が描かれる。七に至っては、これまでの事態場面を主とした叙述から叙述場面を際立たせた叙述者(語り手)による解説で、これまでの文段を統括する機能を示すことになる。各文段はそれ自体が場面を形成し、文段場面ともいいう。通常、物語の場面といわれるのは、ここでいう文段場面をいう。文段場面はさらに大きな単位の文段として場面を形成する。ここでも、文段七まで

を一つの大きな文段場面と捉えることができよう。事態場面・叙述場面とは別に、文レベルにおける場面（文場面）、文段レベルにおける場面（文段場面）、文章レベルにおける場面（文章場面＝作品世界）が想定しうる。各場面に事態場面・叙述場面が存する。

【例4（八）】

89宿場の柱時計が十時を打った。90饅頭屋の竈は湯気を立てて鳴り出した。

91ザク、ザク、ザク。92猫背の馭者は馬草を切った。93馬は猫背の横で、水を充分飲み溜めた。94ザク、ザク、ザク。

89・90文では、再び、事物描写が文末「タ」形でなされ、事態時と叙述時との差異は示されるものの、事態場面・事態時が際立つ。92・93文においても同様。91・94文では、馬草を切る音だけがオノマトペとして表現される。事態場面がクローズアップされ、事態時がきわだった表現である。叙述場面がクローズアップされる文段七とは異なって、事態場面において、馭者による馬車の出発準備という作品世界における新たな展開をも示す文段である。

【例4（九）】

95馬は馬車の車体に結ばれた。96農婦は真先に車体の中へ乗り込むと街の方を見続けた。

97「乗っとくれやア。」と猫背はいった。

（中略）100喇叭が鳴った。101鞭が鳴った。

102眼の大きなかの一疋の蠅は馬の腰の余肉の匂いの中から飛び立った。103そうして、車体の屋根の上にとまり直ると、今さきに、漸く蜘蛛の網からその生命をとり戻した身体を休めて、馬車と一緒に揺れていった。

104馬車は炎天の下を走り通した。（後略）

文段九では、出発の際の事物・状況描写と人物の行動描写とからなる。とくに、100・101文の出発の合図以降は、人物描写ではなく、事物描写で

あることが特徴的である。しかも、102・103文では、文段一以来の「蠅」の行動描写がなされる。「馬車（馬）」の動と「蠅」の静とが対照的である。「蠅」の再登場と「馬の額の汗」（105）とがカタストロフィーの前兆となっている。95文からの叙述は、すべて、文末が「タ」形で、事態時と叙述時との差異は示されるものの、事態場面・事態時が際立つ文段である。

【例4（十）】

106馬車の中では、田舎紳士の饒舌が、早くも人々を五年以来の知己にした。107しかし、男の子はひとり車体の柱を握って、その生々した眼で野の中を見続けた。

108「お母ア、梨々。」

109「ああ、梨々。」

110馭者台では鞭が動き停った。111農婦は田舎紳士の帯の鎖に眼をつけた。

112「もう幾時ですかいな。十二時は過ぎましたかいな。街へ着くと正午過ぎになりますやろな。」

113馭者台では喇叭が鳴らなくなった。114そして、腹掛けの饅頭を、今や尽く胃の腑の中へ落し込んでしまった馭者は、一層猫背を張らせて居眠り出した。115その居眠りは、馬車の上から、かの眼の大きな蠅が押し黙った数段の梨畑を眺め、真夏の太陽の光りを受けて真赤に栄えた赤土の断崖を仰ぎ、突然に現れた激流を見下して、そうして、馬車が高い崖路の高低でかたかたときしみ出す音を聞いてもまだ続いた。116しかし、乗客の中で、その馭者の居眠りを知っていた者は、僅かにただ蠅一疋であるらしかった。117蠅は車体の屋根の上から、馭者の垂れ下った半白の頭に飛び移り、それから、濡れた馬の背中に留って汗を舐めた。

118馬車は崖の頂上へさしかかった。119馬は前方に現れた眼匿しの中の路に従って柔順に曲

り始めた。120しかし、そのとき、彼は自分の胴と、車体の幅とを考えることは出来なかった。121一つの車輪が路から外れた。122突然、馬は車体に引かれて突き立った。123瞬間、蠅は飛び上った。124と、車体と一緒に崖の下へ墜落して行く放埒な馬の腹が眼についた。125そして、人馬の悲鳴が高く一声発せられると、河原の上では、圧し重なった人と馬と板片との塊が、沈黙したまま動かなかった。126が、眼の大きな蠅は、今や完全に休まったその羽根に力を籠めて、ただひとり、悠々と青空の中を飛んでいった。

106文では、馬車の中の様子が説明的に描かれる。「饒舌が…人々を…知己にした。」という文は、構文的には、文末「タ」形の描写の域を出ないが、語彙の選択によって説明的となり、多少の時間的経過をも含みうる。時間的経過は、107の文末「見続けた」と呼応する。108・109文の会話描写は、文段五と同形。110・113文の事物描写は、「馭者」の動作（静態）を表し、114文と呼応する。

115文は、構文的には、「その居眠り」を提題化して文末「タ」形をとった「馭者」の行動（静態）描写であるが、叙述者（語り手）の「蠅」への視点移入を含んでいるために、説明的な性格を併せ持つことになる。120文も叙述者（語り手）の「馬」への視点移入として説明的な性格を併せ持つことになる。116文は、文末「であるらしかった」の推定的判断が叙述者（語り手）のものであるので、叙述場面における叙述時が際立っている。作品のカタストロフィーは、馬車の動きからすると、118文の事物描写が契機となろうが、叙述層分析からすると、この116文の叙述者表現を境に捉えることができよう。これ以降は、事物「馬車」「馬」「蠅」が提題化されて、登場した人物たちは、「人馬」「人と馬と板片との塊」との表現と変わる。

事物描写として状況が描き出され、すべて文末「タ」形で事態場面、事態時が際立っている。126文「蠅」の動態描写（文末「飛んでいった」）で作品が完結されるが、125文の「人と馬と板片との塊が、…動かなかった。」と対照的な事態場面を表す。

文段十は、「蠅」の存在も相俟って文段一との呼応が際立つ。01文の包摂は、他の文段を含むものと解せる、特徴的な一文である、と述べたが、作品全体の象徴的な一文である。文段の呼応は、場面の相關性を表す。作品『蠅』は、叙述層分析の【表】に示されたように、人物の心理描写が出現しない、きわめて客観的な事態場面の連鎖でもって構成されている。カタストロフィーに至る一連の展開を冷徹な「眼」で捉えていることが、叙述の分析と場面構築のありよう上で明確になる、と思われる。

おわりに

文レベルにおける場面（文場面）、文段レベルにおける場面（文段場面）、文章レベルにおける場面（文章場面＝作品世界）が想定しうる。同時に、各場面において、事態場面と叙述場面とが考えうる。叙述層にみられる対象表現と叙述者表現とがそうした場面構築を支える。

文レベルにみられる事態場面・叙述場面の連鎖が文段を形成する。文段にみられる場面の連鎖がより大きな文段を形成する。レベルを異にする場面が相關することでより大きな場面が形成され、作品世界に至るものと考えられる。本稿では「場」と「場面」との概念を区別したが、主眼は、言語表現における「場面」の構築がどのようになされるのか、という点にある。構築される場面概念が一様にとらえられるものではなく、煩瑣である。事例研究を重ねることで、理論構築を確かなものにし、物語世界だけでなく、文章一般から言語表

現一般へと射程を拡げたい。

註

- 1) 本稿では、場と場面とに関して、国語学の諸論を検討し、西郷文芸学にも触れたが、言語学の諸論に関しては省略した。
- 2) 船所（2005）では、仮説、検証として、芥川龍之介『羅生門』の分析を試みている。
- 3) 船所（2001）で提起したベクトルの概念は、本稿では煩雑を避けて用いなかったが、場面論を展開する発想の根柢には存する。

末に着目して—」（表現学会『表現研究』第81号）

三尾 砂（1948）『國語法文章論』（三省堂、『三尾砂著作集 I』2003ひつじ書房所収）

〈付記〉本稿は、平成16年8月28日、国語表現研究会 第78回研究発表会（於：帝塚山大学）における口頭発表「『場』の表現論」をもとに加筆・訂正したものである。

【例】出典

- 1 「ベケット戯曲全集1」安堂信也・高橋康也共訳、白水社
- 2 二葉亭四迷『浮雲』（新潮文庫）
- 3 『国文学 解釈と鑑賞』869、2003.10、至文堂
- 4 横光利一『日輪・春は馬車に乗って 他八篇』（岩波文庫）

参考文献

- 今井文男（1961）『表現学仮説』（龍二山房）
今井文男（1975）『文章表現法大要』（笠間書房）
北原保雄他編（2000）『日本国語大辞典（第二版）』（小学館）
西郷竹彦（1968）『教師のための文芸学入門』（明治図書）
西郷竹彦（1998）『文芸学講座I 視点・形象・構造』（「西郷竹彦文芸・教育全集」14巻、恒文社）
佐久間鼎（1952）『現代日本語法の研究《改訂版》』（恒星社厚生閣、1983くろしお出版復刊）
塙原鉄雄（1963）「場面とことば」（『講座現代語1 現代語の概説』明治書院所収）
時枝誠記（1941）『国語学原論』（岩波書店）
永野 賢（1986）『文章論総説』（朝倉書店）
土部 弘（1973）『文章表現の機構』（くろしお出版）
船所武志（2001）「文章作品の時間表現—テンス・アスペクトの表現論的考察—」（『四天王寺国際佛教大学紀要』人文社会学部 第33号）
船所武志（2005）「場面構築と叙述形態—近代小説の文

【表】横光利一『蠅』の叙述層分析

構成 叙述	対象表現			叙述者表現 説明・評釈	
	事物・状況描写	人物 描 写			
		会話描写	行動描写		
一 真夏の宿場の空虚さ、蠅の動き	02蠅 テイタ 03(蠅) タ 04(蠅) タ			01宿場 デアッタ	
二 将棋に興じる馴者	05馬 テイル 08日の光 (シ)カカッテキタ	07(馴者)	06馴者 (シ)トオシタ		
三 息子の危篤で馬車を待つ農婦	13b返事 ナイ 15a湯飲み テイ (テ) b酒色の番茶 テイタ 17(農婦) 18(饅頭屋の主婦) 20(農婦) 23(馴者) 26(農婦) 27(馴者) 28(農婦) 29a(馴者) 30(農婦)	12(農婦) 14(農婦) 21農婦 タ 22(農婦) (シ)ハジメタ 24馴者 タ 25農婦 タ 29b馴者 タ	09農婦 タ 10彼女(農婦) タ 11(農婦) (シ)ツヅケタ 13a彼女(農婦) タ(ガ) 16農婦 タ 21農婦 タ 22(農婦) (シ)ハジメタ 24馴者 タ 25農婦 タ 29b馴者 タ	19答えたの (者) デアル	
四 駆け落ちする若者と娘	31種蓮華を叩く音 テクル 38汗 タ 42牛の鳴き声 タ 44種蓮華を叩く音 テクル	34(娘) 35(若者) 36(娘) 39a(娘) 40b(若者) 43a(娘) 46(娘) 48a(若者)	32若者と娘 タ 33娘 タ 37若者 タ 39b娘 タ 40a若者 スル(ト) 41二人 テシマッタ 43b娘 タ 45娘 タ 47若者 (シ)ツヅケタ 48b若者 タ		
五 母親に手を曳かれてきた男の子	54馬 タ 57馬 タ	50(男の子) 51(母親) 53b(男の子) 56b(男の子) 58(男の子) 59(母親)	49男の子 タ 52男の子 タ 53ac(男の子) タ 55a男の子タ(ガ)、b耳(シ)ナカッタ 56ac(男の子) タ		

文章表現の場面論

六 田舎紳士に近づいてうろたえる農婦		60(田舎紳士) 67(農婦) 68(田舎紳士) 69(農婦) 70(田舎紳士) 73(農婦) 74a(若者) 75a(娘) 76(農婦) 77a(田舎紳士) 78b(農婦) 80(農婦) 82(馴者)	61田舎紳士 タ 63b(田舎紳士) タ 64彼(田舎紳士)の胸 テイル 65(田舎紳士) テイタ 66農婦 タ 71若者と娘 テキタ 72農婦 タ 74b若者 タ 75b娘 タ 77b田舎紳士 タ 78ac農婦 (シ)ダシタ 79(農婦) タ 81馴者 タ	62彼(田舎紳士) (ニ)ナル 63a効 アッテ
七 蒸しあがる饅頭を待つ馴者	84人々の汗 タ			83馬車 (ス)ルノデアロウ 85馬車 (ス)ルノデアロウ 86誰も …ナイ 87饅頭 デアッタ 88ナゼカトイエバ、馴者 …ティタノデアッタカラ
八 出発の準備にかかる馴者	89柱時計 タ 90竈 (シ)ダシタ 91ザク、ザク、ザク。 93馬 タ 94ザク、ザク、ザク。		92馴者 タ	
九 出発して炎天下を走る馬車	95馬 (サ)レタ 100喇叭 タ 101鞭 タ 102蠅 タ 103(蠅) (シ)ティッタ 104馬車 (シ)トオシタ 105a(馬車) スル(ト)、 b森 タ	97a(馴者)	96農婦 (シ)ツヅケタ 97b猫背(馴者) タ 98五人の乗客 (シ)ハジメタ 99馴者 タ	
十 馴者の居眠りで崖下に墜落する人馬	106馬車の中 タ 110鞭 タ 113喇叭 (シ)ナクナッタ 117蠅 タ 118馬車 (シ)カカッタ 119馬 (シ)ハジメタ 120彼(馬) デキナカッタ 121車輪 タ 122馬 タ 123蠅 タ 124(蠅) タ 125塊 (シ)ナカッタ 126蠅 ティッタ	108(男の子) 109(母親) 112(農婦)	107男の子 (シ)ツヅケタ 111農婦 タ 114馴者 (シ)ダシタ 115その居眠り タ (115) 116 デアルラシカッタ (120)	

(事物・状況描写)

(人物会話描写)

(人物行動描写)

(説明・評釈)